

合に必ず注意しなければならぬ事でございませう。たとへば或一人の有力な兒が何時でも先登になる、あとの兒は何時でもくっついて歩くばかりといふ風な事になりますと兩者の力のへだちりが益々多くなりまして全体の爲になりません。それよりは全幼兒のどの兒でも先登になるだけの力を有つて居るやうに導くのが、多數の兒を預つてなるべく一同を良く教育して行く私共の責任でございませう。

保母は天氣に由つて適當な遊戯をするやうに、幼兒の心身の發達に適當する様に氣を利かさねばならぬ。たとへば寒い空氣の乾いた日に高い聲のいる様な事をしたり、暑苦しい日に蒸氣罐の遊をするなどはいづれも適當に撰み得たりとは言はれぬ

(完)

保母の讀みものは澤山にある

東洋幼稚園保母 岸邊 福雄

昨年末頃の本誌上に、東君が翻譯して掲載された、エー、エル、ハヴ君の、米國セントルイス博覽會幼稚園教育部會に報告中、日本の幼稚園は近年長足の進歩をして、其數も少なくないが、只だ恨らくは、此の教育に従事せる保母の研究に當てたる書物が皆無の姿であるから、一向に進歩改良が出来ないとの意味に付き、一般の保母達が、如何なる感じを以て讀了したかと思ひ、其後小生の幼稚園に來觀した人々、並に知人のものどもに、實際保母の研究する書物がなにかと問ふて見ると、いづれも同感との事である。なかには幼兒教育を無視する結果だなど、憤慨様の氣焔を吐くのもあった。

處で、ハヅ君の説は、特に保姆の爲めにと書いたもの、即ち幼稚教育にのみ關して著述したものととの趣意で、保姆か教育者として研究するに適當なる書物がないと、云ふた譯ではあるまい。例へば、肉も魚も野菜も、夫れ／＼調理してご馳走に拵えてないと云ふので、肉も魚も野菜もないと云ふたのではなからうと察せらるゝ。もしも左様でない、ハヅ君の眞意を知るに苦ひのである。又日本では保姆の研究資料がない、學者連中も不親切だなど、不平を漏らす人々も、同様の見解であろうが、こゝ一つ研究ものであらうと考えらるゝ。何せなれば肉も魚も野菜もあり。只だ僅かに手を下して料理するならば、立ち所に海山の珍珠は味う事が出来るのに、其一舉手一投足の勞を惜んで、其好良の材料を隻手傍觀しな

ら、飢を呼ばるものがあるならば、何人が其困狀を誠として、一掬の涙と一椀の飯とを與へるものがあろうぞ、寧ろ其餘りに怠惰で氣儘ものなるに悪く／＼しき感じをさえ抱かせるであらう。なるほど、加減よく料理して、サアおあがりと供せらるゝのは、自から手を下して後に食べるよりも、都合は善いけれども、夫れは完全な場合を望む、一種の贅澤で、時と場合によつては、自から料理人にも主人にも又お客にもならなければならぬ事もあるが如く、幼稚園教育に關しての著述の少ないのは事實だが、之れは止むを得ない、と云ふものは、當今全國の幼稚園の總數か三百位である、折角恰好の著作が出来た處で、其需用が少ないから、營利をのみ標準せとる書店が、到店出版する道理がない。此現狀は、こゝ三年や五年經た處で

容易に變りはあるまい。すると、保育の爲めに、著者はひと出版する書肆もあるまいから。小生が語つた人々の如き心懸けの保姆達を満足させる好著は、先づ得られない。すると、學は薄く識見には乏しく、只だ其日送くりの經驗位では、何年かゝつても到底幼稚園教育の改良も進歩も企てる事は出来ない、實に残念の次第である。併しながら、茲に肉もわり野菜もわり尙卵も魚もあるとしたならば、更に駟走がないとは云へない。勇奮一番擲あやどりお臂をはしより、鍋坐に入つて包刀を執るの元氣と熱心さえあれば、よしや他人の手をもつて造られた、滋味でなくても、手作りの美味に鼓腹の太平を謠ふ事を得るは容易の業であるが如く、研究の資料についても、今一段の奮勵をして、熱心に之れを求むるならば、所要の參考

書は續々と與えらるゝのである。

元來吾れゝ保姆は、教育に従事して他より先生と尊重せらるもの、内で、一番に學問が少ないのであるから、手あたり次第に通讀しても、悉く得る處がある。幼稚園の保姆は、只だ保育に關する事のみ讀み、小學教員は、僅に教科書の配當表や教按のみを目にして居る様では、教育者の最大なる意義を貫徹する事は出来ない。教育なるものは、社會の進歩に隨伴して進まなければならぬので、學校教育は元より、家庭教育に於ても總て進歩的でなくてはならぬから、其家庭教育を補助するところの幼稚園も、無論進取的であるべき筈である。此邊の議論は随分重大な問題で、職に保育の任にあるものは、疾くより研究しなければならぬ。さりながら、之れらに就き、特に幼稚園教

育の爲めにと著作されたものはない。多く學び博く讀んで自然に一個の意見も出來方法も定まり茲に初めて主義ある保育法となるのである。更に詳細に論ずると、多枝に互り復雜となり、此の小冊子では述べ切れないから、今一二項を掲げると、子供の行儀作法である、人が世の中に只だの一人住むなら、左様な六ヶ敷ものは、米粒程も入らないが、二人以上住むとなると、是非其なくてはならぬ。夫れ故、今日の如く進歩せる社會となつては、餘程大事な事である。が、之れは人生最極の目的ではなくて、人類相互の關係を圓滿にする一種の方便であるから、教育上の全力を、茲に集注するが如き愚を演じない様になければならぬ。田舎ものと云へば、不行儀不躑で、都會のものには三文の價値もない様に嗤はれるが、さて我國に

於て、國家の盛運を謀り一國の柱石となつた人々は、この都會人士の嗤笑を蒙りし田舎ものに多い。子供に行儀作法を教えるのが、保育の主眼など、考へ損いをするものもあるまいが、こゝらは程度問題で、餘程細密に注意を要する處である。由來華族は此の行儀作法を、八ヶ間敷云うたのであるが、さて其結果は憫れむべきものが多い。小生が詳論しないで、左の文を掲げる。之れは奉天の會戰に、名譽の戦死をした、伯爵南部中尉の遺書なる華族論の一部である。

現今の華族は、悉く眞に上流に位するの品位を有しあるや、果して國家の干城、皇室の藩屏たるの實を擧げつゝあるや、余は残念ながら悉く然りと云ふを得ざるなり。
講釋師が華族と書して馬鹿と讀ませ、新聞小

説の主人公は多くは華族にあらざるはなきは
 何ぞや、華族にして眞に其品位を保ち其責を
 全うすれば、講釋師何ぞ此の言をなさんや、
 小説家何ぞ此の筆を執らんや、思うて茲に至
 れば痛恨に堪えざるなり。
 と、行儀や言葉扱いのみに汲々として居るものが
 あるならば、幼兒の教育法を、餘りに單純に見積
 らないで、世の趨勢を考えなければならぬ。併し
 之れとても、保姆の爲めにと便利に書き示したも
 のはない。矢張り多く聴き廣く調べて、初めて自
 家薬籠中のものとなるのである。又、女子の教育
 法とても、今日は甲唱え乙論ずで、歸一して居る
 譯でもないが、一般 優美なる女子を成くれば夫
 れで當初の目的を達した様に澄し込んで居るもの
 もある、賢妻となり良母となるにしても、事に

敏き智慧と物に優しい情ばかりでは、到底役立た
 ない。之れを實行するの元氣がなくてはならぬ、
 某家庭雜誌に、妻を主人が呼ぶにオイコリヤ、は
 前世紀の口癖で、奥様と云ふのは文明式だなど、
 書いて居るが、夫れらの形式上の事は何んどでも
 變えられようが、變らないのは妻の實質で、實際
 に主人を助けて共々事業の成功を謀るの膽力と手
 腕のわる人はぬれ、一般に厄介物の様に見える、
 今や我國も東洋の日本ではなくで、世界に於ける
 大日本帝國である。此後青年子女は是非共、此の
 大きな檜舞臺で働かなければならぬ。僕は今から
 米國の勞働者となり、十年許り働いて、一と儲け
 をして來るから、お前は針仕事なりとして、子供
 を養育して居れ、其内には花もさき實も上る身の
 上に成つて來るから」と相談を持ちかけられて「夫

これは面白い、飛ばなけりや腰も打たぬとやら、後は心配には及びませぬ、旅用が不足なら、私の帯も賣りましよう」と勇まじき決心を持つて、主人の奮發を助ける様な氣丈夫な女子が入用ではあるまいか、今日の女子は概して消極的で涙脆くて、男子の事を妨げても助けるなどの眞似も出来ぬと聞く。果して然るや否やは知らないが、もしも事實ならば、男子的の性質を女子に加味しなければならぬ。是亦大問題で、研究の餘地が澤山ある。して此種の事は、幼稚保育に關係しない様に考へる人もあるならば、痴人の仲間であらう。けれど、之れも保母の讀むものにとて備えた書物は無い、廣く問ひ多く讀んで、初めて暗中に灯火を得るのである。

かの不平の保母達の中には、讀んでも了解出

来ない事があるも、懇切なる教示を受けるの便がないと、嘆く人もあるが、幸にも東京には元良博士を會長とした、兒童研究會なるものがある。フロエベル會の主幹なる中村五六氏も、其理事とかである。去る二月其公開講演が帝國教育會であつた。尚毎月一回開かるべき筈、講師はいづれも熱心の諸氏、此時を利用して質問するならば、喜んで懇切に教授して呉れるのである。

保母の讀む書物がないなど、嘆聲を發するを止めて、何でも讀むがい、哲學書を讀めよとは保育に無關係の様であるけれども、子供の美感を研究せんには、是非其此書に寄るべく、大酒呑みの子供の發達の不良は、遺傳學を研究すべく、顔色蒼白運動遲緩にして泣き易い子供は、先づ營養の如何を調べねばなちぬから、生理學に問はねば

ならぬ、尙其他にても同様、殊更に幼稚園保育の爲めにと、著作してなくても、活眼を開いて活書を読めば、得る處は莫大である。海山の珍味を全く整えて、サアか上りと差し出さなければ、食べないとは飽食の贅澤人が云ふ事で、飢に瀕して居るならば、材料さえあれば一舉手一投足の勞は惜まない筈である。保姆の讀みものなき尙飢渴の感と同様なら、先づ圖書館に往つて一日を費せ、實に今日の嘆聲は夢の如く消ゆるであらう。

讀書の葉

小公子

故若松しづ子女史の譯、原書は、リットル、ロールド、フアントルロイといふ名で、外國でも有名な家

庭小説である。大分前に譯せられたので、今日では、もう忘れて仕舞はれたかの様にもあるから、更に茲に紹介しよう。

主人公は、セドリツクといふ可愛い子供、父は英國の侯爵の第三子、母は亞米利加の身分なき婦人、此婦人、結婚した、めに父は、故郷の侯爵から殆んど勸當同様になつた。其中に此子が生れて、間もなく父は死去した。所が、侯爵家では、相續人がなくなつてとうとう其相續者としての運命は此可憐なセドリツクに回つて來て、米國から英國の侯爵家に迎へられることになつた。然し、此侯爵即ちセドリツクに取つてのお祖父さんといふ方は子供の愛などいふ事は知らない上に非常に癡癡な頑固な方で、殊に米國嫌と來て居るから、セドリツクのお母さんを惡むことが甚しく、仕方なし